

サタンの覚醒劇

室田五郎

I

ミルトンは *Paradise Lost* の第I巻において、サタンがねたみと復しゅうにかきたてられて人々をだましたとのべ、その結果人が神にそむいたのであるという (I. 33-36)。即ち、サタンのねたみと復しゅうは *Paradise Lost* の叙事詩のそもそもの発端であり、これなくしてこの叙事詩は書かれなかった筈である。

ミルトンはこの叙事詩の中で、ただ人間のさいしょの不従順のことをのべようとしているのではない。それがおこった背景としての天の事情というものをも知りたいのである。

そして天の事情のもっとも知られざる神秘の部分に詩的な洞察を加えることにより、すべてを知ろうという野心をミルトンが抱いていたと読者は感じないわけにはいかない。

さて、この叙事詩の物語の発端は、明らかにラファエルがアダムに語る「天の戦い」がおこる事情にあるのである¹⁾。

but not so waked

Satan, so call him now, his former name
Is heard no more in heaven; he of the first,
If not the first archangel, great in power,
In favour and pre-eminence, yet fraught
With *envy* against the Son of God, that day
Honoured by his great Father, and proclaimed

Messiah king anointed, could not bear
Through pride that sight, and thought himself impaired.
Deep malice thence conceiving and disdain,
Soon as midnight brought on the dusky hour
Friendliest to sleep and silence, he resolved
With all his legions to dislodge, and leave
Unworshipped, unbeyed the throne supreme
Contemptuous, and his next subordinate
Awakening, thus to him in secret spake. (PL V. 657—72)

(以下引用中のイタリックスはすべて筆者)

されどかくならぬ醒めし

サタン、今かく彼を呼ぶ、彼の元の名は
はや天にて聞かれぬ故。彼は高き位のもの
一位の大天使ならねど。権力にて偉大
めぐみ、卓越にも、大いなれど、心に
神の御子にねたみをおこせり。それその日
御子が御父にほまれ授かり、かつ宣せられて
メシヤ王とて油授かりしが、高慢故
その姿見るに耐えず、自ら心傷つき
濃き悪意を其処より抱きし、又侮べつさえ、
すぐ深夜小暗き時もたらすや
眠りと静寂にいとよき時なれば彼の腹に
自が全軍団と共に移動し去らんと決せり
かの至高の玉座をば拜せず、服せず
不敬もて、さればおのが腹心の手下を
呼び醒まして、かくひそかに語り。

サタンは明らかにしっとにかられて、悪意と憤怒をつのらせて眠りを
拒んで、腹心の部下を目ざめさせるのだ。明らかに、ミルトンはサタン
を、眠ることもまどろむこともない存在たらしめている。

サタンは、次のように呼びかける。

Sleep'st thou companion dear, what *sleep* can close

The eyelids? And remember'st what decree
 Of yesterday, so late hath passed the lips
 Of heaven's almighty. Thou to me thy thoughts
 Was wont, I mine to thee was wont to impart;
 Both *waking* we were one; how then can now
 Thy *sleep* dissent? (V. 673—679)

汝親しき友よ眠るか、何たる眠り
 汝が眼ぶた閉じるや、そも記憶するや
 昨日の布告を、新たに天の全能者の口より
 出でしものを。汝、我に汝が思いを
 又我、汝に我が思いをうち明けしもの
 共に目ざめて我ら一つたり、いかなれば今
 汝が眠り仲裂かん。

このサタンの呼びかけを読んで、読者は、彼の腹心の部下は、サタンと違って眠っているということを理解する。しかし読者は必ずしも腹心の部下がサタンの前で眠っていた、と考える必要はないであろう。というのはサタンと部下の違いを際立たせることの方が、ミルトンの目的であったのではないかと思われるからである。

そのように対照的に区別することが、サタンの意識的に目ざめた悪意と、部下達の幸せな²⁾無自覚³⁾とを浮きぼりにさせるのに役立つ。

即ち、読者がここで少なくとも読みとるべきことは、サタンの目には部下達は、御子が父なる神によって栄光を与えられ、油をそそがれし王、即ち救世主と宣明された出来事にもかかわらず、彼自身のように悪意を抱くに至っていないと映っていることなのである。

サタンが、部下に「何たる眠り汝が眼ぶた閉じるや」と声をかけているのだが、読者はここで、サタンと部下との意識の差をはっきりと読むことができる。ミルトンがサタンを、彼の部下とははっきり違う位置におこうとした意図を、ここによみとることができよう。

サタンの目ざめは、神の「眠れぬまなこ」(V.647)のパロディーである。それに反して「自覚の足らない」部下達はサタンのもっとも権威のある声(V.705)には全く弱く抵抗力のない存在である。

but *all obeyed*

The wonted signal, and *superior voice*
Of their great potentate; for great indeed
His name, and high was his degree in heaven;
His countenance, as the morning star that guides
The starry flock, *allured them*, and with lies
Drew after him the third part of heaven's host:

(V. 704—710)

されどすべて服して

なれし合図と自が大領主の高き声に
従いぬ。それまこと大なるは
彼の名、高きは彼が天位なれば、
彼の面顔、天の群星率いる明星のごと
彼らの心まどわし、かつ虚言もて
天の軍勢の三分の一を引き去れり

部下たちはサタンの偉大な姿にすっかり感覚的にまどわされて服従してしまふ。読者も共に惑わされかねない。ミルトンの計算もそこにあるのかもしれない。

サタンの部下がすべてこのように服従したのではなくて、ミルトンがアブディエルという天使に、サタンに反抗させていることは興味深い。サタンにとって彼は成り上り者であり、にくむべき存在となっている。

「天の戦い」が始まる前にアブディエルは、サタンと訣別する。彼はサタンと別な意味で目ざめていた。彼は孤立していたが (V. 897) おそれを知らずに、今までの同僚たちに、神のことばに忠実であるようにと、訴えたのである。明らかにアブディエルはサタンの部下たちに、言葉をもって影響を及ぼそうとしたのである。ここには、するどい目ざめの戦いが、サタンとアブディエルとの間におこったのである。前者のめざめは、ねたみとにくしみにより、後者は熱烈なる神への信仰 (V. 849) によるものであった。

II

サタンの目ざめについて、ここでI巻に言及したい。I巻は *Paradise Lost* の物語の内容から見て最初ではなくて、すでに出来事の途中である。そこにおいてもサタンがやはり一貫して目ざめていることがわかる。場面は地獄である。

I. 36—53 まではサタンが天から真逆さまに地獄におとされた事情が、*Paradise Lost* 全体に対する導入として簡潔にのべられている。

I. 53—75 にはミルトンによる地獄の描写と、地獄の運命がサタンに与える意味とが、おりまぜて語られている。地獄の描写そのものは空間的であり、サタンにとって脅迫的、懲罰的であるが、サタンの心を鋭くさいなみ、絶望から一そう意識の尖鋭化の加速を暗示するような記述となっている。

I. 76—83 においてサタンは、初めて、彼の部下との関係で描かれる。そして I. 84—124 においてサタンはビエルゼバブに話しかける。そしてサタンはプライドと滅びの最高の緊張の中に自己を表現する。

If thou beest he; but O how fallen! how changed
From him, who in the happy realms of light
Clothed with transcendent brightness didst outshine
Myriads though bright: if he whom mutual league,
United thoughts and counsels, equal hope
And hazard in the glorious enterprise,
Joined with me once, now misery hath joined
In equal ruin: into what pit thou seest
From what highth fallen, so much the stronger proved
He with his thunder: and till then who knew
The force of those dire arms? Yet not for those,
Nor what the potent victor in his rage
Can else inflict, do I repent or change,
Though changed in outward lustre, that fixed mind
And high disdain, from sense of injured merit,

That with the mightiest raised me to contend,
 And to the fierce contention brought along
 Innumerable force of spirits armed
 That durst dislike his reign, and me preferring,
 His utmost power with adverse power opposed
 In dubious battle on the plains of heaven,
 And shook his throne, What though the field be lost?
 All is not lost; the unconquerable will,
 And study of revenge, immortal hate,
 And courage never to submit or yield:
 And what else not to be overcome? (I. 84—109)

汝が彼なれば、何たるぶざま、変りよう
 彼とは。彼、光の幸いの国にて、
 極まる輝きに装いて、他を凌げり
 幾千とて輝けど、その彼なら、同じ結び
 同じ思いと志、同じ希望と、
 同じ危険をもて光榮ある事にはげみて
 我とかつて結びし故、今みじめぎ組みて
 同じ破滅に在り。見る如く何たる奈落に
 何たる高みより落ちしか、かく強しと
 神その雷にて証しせり。それまで誰知りしか
 かのおそろしき武器の力を。それかとして
 又、力の勝者怒りて
 他に振う力ありとて、悔いも変えもせぬ、
 たというわべの光変るとも、あの固き心も
 高き侮べつも、それ不面目の恥から来しもの
 そは我をして全能者と戦わせ
 かつはげしき抗争へ無数の
 よろえる靈をあつめたり、
 彼らは敢て彼の支配を嫌い、我をえらび
 彼の上なき力に反対勢力を抗いて
 天の平原にて勝敗つかぬ戦いをなし、

彼の王座をゆるがせり。敗れしも何ぞ
すべて敗れしに非ず。不屈の意志あり
復しゅうの追求心、不滅の憎悪
絶対にゆずらず従わぬ勇氣あり
されば、征服されぬもの他に何あらん

今までサタンは殆どモノローグの如くに自己表現をくりかえし、その中で極度に緊張した自己統一と憎悪とをもり上げて来た。しかし I. 110—124 では、腹心のビエルゼバブに話しかけ、彼に親しく向き直りゼスチャ入りで彼を教育しはじめるのである。

That glory never shall his wrath or might
Extort from me. To bow and sue for grace
With suppliant knee, and deify his power,
Who from the terror of *this* arm so late
Doubted his empire, that were low indeed,
That were an ignominy and shame beneath
This downfall; since by fate the strength of gods
And *this* empyreal substance cannot fail,
Since through experience of *this* great event
In arms not worse, in foresight much advanced,
We may with more successful hope resolve
To wage by force or guile eternal war
Irreconcilable, to our grand foe,
Who now triumphs, and in the excess of joy
Sole reigning holds the tyranny of heaven. (I. 110—124)

その栄光を彼の怒りも力も
我から奪わせぬ。めぐみ求め膝屈し
押し願うこと、彼の力崇めることは、
先頃彼この腕力恐れ自が天国も危ぶみ
危惧せしに、それまこと下劣なことぞ
それ不名誉と恥にしてこの墜落にも

おとること、それさだめて神々の力
及びこの靈質崩れること能わず
それこの大事件の經驗をへしにより
武力劣らず、洞察はるかにすすみて
我ら更に成功ののぞみもて意を決めて
力にてか術策にてか永遠の戦い挑み得ん
妥協なく我らが大敵にむかいて、
その敵今勝ち誇り、喜びの余り
天の庄政者として支配を独り取る。

サタンの意図は、ビエルゼバブの意識を彼自身の意識のレベルに高め、かつ強めることにより、彼と共に神への復しゅうに覚悟させることであった。彼は気絶からさめたばかりのビエルゼバブを、必死になって覚醒させようとしているのだ。this というゼスチャにともなう単語が、続けて4回もつかわれていることは注意を要する(113, 116, 117, 118)。

ミルトンはサタンの様子を though in pain/Vaunting aloud, but racked with deep despair (痛みても/高く誇りつつされど深き絶望になやみ) (I.125-6) として、プライドと絶望にひき裂かれんばかりの緊張の描写をもって説明している。それに対してビエルゼバブの答えは何であったか。それはサタンの目ざめた意識とは程遠いものであった。

But what if he our conqueror (whom I now
Of force believe almighty, since no less
Than such could have o'erpowered such force as ours)
Have left us this our spirit and strength entire
Strongly to suffer and support our pains,
That we may so suffice his vengeful ire,
Or do him mightier service as his thralls
By right of war, whate'er his business be
Here in the heart of hell to work in fire,
Or do his errands in the gloomy deep;
What can it then avail though yet we feel
Strength undiminished, or eternal being

されどもし彼我が征服者（そを我今
 止むむく全能と信ず、それ劣れる者
 かかる我らの力にうちかちし筈なし）
 その彼我らにこの我らの全霊・力を残せしは
 我らが苦痛をつよく忍び支えん為、
 そは我ら彼の復しゅうの怒りを満たさん為か
 奴隸とて更に烈しき奉仕を彼にせんとか
 戦勝故に。彼の企て何なるも
 地獄の真中で火中で働く為、
 或いは又小暗き奈落で走り使いせん為か
 何の利益あらん、なお力衰えぬを
 感じ、或いは不滅の存在を感じずとも
 永遠の罰うけん為ならば。

即ちビエルゼバブの答えは、あれほどサタンが親しく教育をほどこしたのに、悲観的であった。つまりサタンが期待するような悪意を、まだ心の中に目ざめさせていないのである。これをきいてサタンが抛っておけなかったことは察するに余りある。それ故サタンは危機感をいだいて、すぐさま with speedy words (I.156) ビエルゼバブを叱りつけるのである。

Fallen cherub, to be weak is miserable
 Doing or suffering: but of this be sure,
 To do aught good never will be our task,
 But ever to do ill our sole delight,
 As being the contrary to his high will
 Whom we resist. If then his providence
 Out of our evil seek to bring forth good,
 Our labour must be to pervert that end,
 And out of good still to find means of evil;
 Which oft-times may succeed, so as perhaps

Shall grieve him, if I fail not, and disturb
His inmost counsels from their destined aim. (I. 157—168)

おちしケルブよ、弱きこと哀れなり
果たすにも忍ぶにも、されどこれを知れ、
いかなる善も我らのわざとならず
常に悪をなすこそ我らの唯一の喜び、
そは彼の高意に逆らうことなれば、
我ら抗らう者故、もし彼の摂理
我らの悪から善をひき出すことを求めば
我らの働きその目的をくつがえし
善から常に悪の手段見出すことなるべし。
そは時に成功し、かくて、おそらくは、
彼を悲しませぬ、狙い違わずば、又妨げん
彼の意中の意をも、所期の目的狂わせて。

そのあと一気にビエルゼバブをひきつけて火の海から遠くの平地へ赴く。この間サタンはビエルゼバブの悲観論を叩き直して洗脳しようという意気ごみが見られるから、強引である。サタンは、I. 178において *Let us not slip the occasion* (この機をのがすまい) といい、地獄に平静がもどってきたのをいいチャンスと言うが、他方、これは腹心の部下を自分の思い通りに従わせるのも今がチャンスであると考えたのが、別な表現になって表わされたのだというようにも読める。

さて実際にサタンと腹心の部下が地獄の陸にたどりつくの間に間があるが、その間には、サタンの巨大な体軀の説明がはさまっている (I. 192—224)。読者はしばらくサタンのことばがもたらす緊張から解かれる。但し、ミルトンは読者に、サタンをしてこれから思うままに悪意を働かせることが、どういう意味であるかをさり気なくあいだに説明を加えてサタンの未来を暗示している (I. 211—220)⁴⁾。

221 からサタンはフェニックスの如くに体軀を張り切らせ、地獄の火もよせつけず、翼を張り地獄のやみ夜に重々しいからだを飛立たせて灼熱の硬地へおり立つ。サタンは恐ろしく脅迫的背景を前にしており立つが、腹心も供に在るのに腹心の方への描写は全くない。ただサタンを超

能力を、そなえた存在として驚異的たらしめている。

サタンは I. 242—270 にかけて又語り出す。ビエルゼバブはまだ沈黙している。ミルトンが彼にまだ黙らせているのは、サタンに腹心の部下への教育を続けさせることの必要からである。即ちビエルゼバブはサタンの語る一つ一つの言葉から心の糧をえて、やがてサタンを支え、かつ助ける為の意識の目ざめをえるようになるというのが、ミルトンのすじがきなのである⁵⁾。

サタンのはじめの言葉は、確かに悲観的である。それはビエルゼバブの悲観主義にもう一度話しをなじませてから本題に入るという配慮からのようでもある。Be it so (245) ということばから入るが、246 からは淡々と事実を見すえてやがて本題に入っていく。

Be it so, since he

Who now is sovereign can dispose and bid
What shall be right: furthest from him is best
Whom reason hath equalled, force hath made supreme
Above his equals Farewell happy fields
Where joy for ever dwells: hail horrors, hail
Infernal world, and thou profoundest hell
Receive thy new possessor: one who brings
A mind not to be changed by place or time,
The mind is its own place, and in itself
Can make a heaven of hell, a hell of heaven.
What matter where, if I be still the same,
And what should be, all but less than he
Whom thunder hath made greater? Here at least
We shall be free; the almighty hath not built
Here for his envy, will not drive us hence:
Here we may reign secure, and in my choice
To reign is worth ambition though in hell:
Better to reign in hell, than serve in heaven. (I. 245—263)

さもあるべし、そは

今最高者こそ能う、よしとみること
決めかつ命じるを。彼よりいと遠きこそよし。
彼と理性にて等し、彼力に於てこそ
同輩に君臨す。幸いの地よ、さらば
喜び永遠にすむ所よ、迎えよ恐怖よ。迎えよ
下界よ、汝底しれぬ地獄よ、
汝の新しき主を受けよ、我携え来たるは
所にも時にも変わることなき心ぞ、
その心自が住む所、又自が中に
地獄から天国を、天国から地獄を作りうる。
どことてさわりありや、もし常に同じなれば
又何とて。ただわずかに彼より遜色なし
雷故に我より強き者に比し、ここにて少なくとも
我ら自由、全能者はねたみて
ここを造りしに非ず、ここより追わぬべし、
ここに我ら安全に支配し、我がえらびにて
支配すること、地獄とて野心に備す。
天にて仕えるより地獄にて支配する方よし。

結論からいえば、地獄における自由、神からもっとも自由である方が、神に支配されるよりも自由であるという理論で、ビエルゼバブの悲観主義（I.143—155）を払拭してしまうのである⁶⁾。

III

ここでサタンの仕事は次の段階にうつる。即ち、ビエルゼバブをやっ
と自分の腹心たらしめたあとに来る仕事は、他の部下たちを如何にして
同様に目ざめさせるかということである。これをサタンはビエルゼバブ
に答えさせる質問として発したのである。

もちろんこのような質問を発することができたのは、サタンが、ビエルゼバブは彼の意識のレベルにまで目ざめた、という確信を持ったからであろう。だからサタンはビエルゼバブが彼の質問に模範解答といえなくとも、少なくとも、悲観論を棄てた答えをすることを期待していたに違

いない。そして期待通りにサタンは報われたのだ。即ちビエルゼバブは部下たちの建て直しに賛成したからである。

ビエルゼバブの答は極めて短い。彼の答えは辛うじてサタンの意に沿うようなものになっただけのようにきこえる。サタンはそれでよし、あとはもうきかなくてもよい、といわぬばかりに岸に向かって動き出しているのである。それは 283—4 の He scarce had ceased when the superior fiend/Was moving toward the shore (語り終るや大魔/岸辺に向いたり) というところに示されている。

サタンはいよいよ部下の大群に向かって大きな仕事にかかるのであるが、ミルトンの筆は再びサタンの描写にとりかかる (I. 284—298)。サタンの姿は月のような楯を肩にかけ、槍はノルウェーの山の一番高い松の木から切り出された海軍船のマストの如く長く、それも灼熱の道を歩く不安な足どりをささえる杖のようなものであったというのである。

ミルトンは、サタンがビエルゼバブに目ざめさせようとした時にも、サタンを壮大に雄大に描いた⁷⁾。今度、無数の部下たちが気絶して失神状態になっているのを、目ざめさせなければならない時に、再びサタンを槍と楯をもつ聳え立つ巨漢として描くのである。宛も全軍に轟く声をひびかせるには、巨木に数倍する高さが必要であるかの如くである。

サタンは全軍にとどけと叫ぶ。地獄がサタンの声に反響する。ミルトンはサタンの大音声をして、又その巨大な権威ある姿をして、無数の天使を目ざめさせるように筆をすすめる。

Princes, potentates,
Warriors, the flower of heaven, once yours, now lost,
If such *astonishment* as this can seize
Eternal spirits; or have ye chosen this place
After the toil of battle to repose
Your *wearied virtue*, for the ease you find
To *slumber* here, as in the vales of heaven?
Or in this *abject posture* have ye sworn
To adore the conqueror? who now beholds
Cherub and seraph rolling in the flood

With scattered arms and ensigns, till anon
His swift pursuers from heaven gates discern
The advantage, and descending tread us down
Thus *drooping*, or with linked thunderbolts
Transfix us to the bottom of this gulf.
Awake, arise, or be for ever fallen (I. 315—330)

王者よ、権力者よ

戦士、天華よ、かつて天、汝のもの、今失せし、
もしかかる気裏が捕えうるとせば宜べ
不滅なるに、或いは汝らこの地をえらびしは
戦いの労苦のあと休めんとてか
汝の疲れし力を？ それ汝ら安らぎ見出せるは
眠らんとてか、天の谷におけるごと？
或いはこの卑しき姿勢にて汝ら誓いしか
征服者を崇めんとて？ 彼今見る
ケラブ、セラフ波間にただよい
武器、旗散乱しおるを、されどやがて
速かなる彼の追撃、天門より機よしと
見、かつ降りて我らを踏みにじらん
かく悄然たるまま、或いは連放せる雷もて
我らをこの海の底につなぎとめん。
目ざめよ。立て、さなくば永遠に果てよ

330行の *Awake, arise, or for ever fallen* は何という権威あるきびしいことばであるうか、サタンの最もきらいなことが、*astonishment* (317), *wearied virtue* (320), *abject posture* (322), *slumber* (321), *drooping* (328) なのである。即ち彼は怠惰をきらい、目ざめを好んでいるのだ。

大声で呼びおこされた部下たちはどう反応したかは極めて興味あることである。

They heard, and were abashed, and up they sprung

Upon the wing, as when men wont to watch
On duty, *sleeping found* by whom they dread,
Rouse and bestir themselves *ere well awake*,
Nor did they not perceive the evil plight
In which they were, or the fierce pains not feel;
Yet to their general's voice they *soon obeyed*
Innumerable. As when the potent rod
Of Amram's son in Egypt's evil day
Waved round the coast, up called a pitchy cloud
Of locusts, warping on the eastern wind,
That o'er the realm of impious Pharaoh hung
Like night, and darkened all the land of Nile: (I. 331-43)

彼らきき、恥じて、とびだてり
翼ひろげて、あたかも見張りの者ら
任務中におそれる者に居眠れるを発見され
よくさめぬうちに立ちてあわてる時の如し。
彼らとて自がおかれし悪しき境遇知らぬ
わけでも、げげしき痛み感じぬでもなし
されど彼らの大統卒の聲に彼らすぐ従えり
数知れず。それあたかもアムラムの子
エジプトの悪しき日に強力なる杖を
あたりに振りいなごの黒き雲を呼び
たるに東風にのりて流れきて
不信なるパロの領土の上にかかりたるさま
夜に似て、ナイル全土を闇とせる時のごと、

部下たちの軍団のあわてぶりはユーモラスである。サタンはそれを見てどう感じたかは描かれていない。しかしサタンの反応をこの部分は伝えているとっていいだろう。即ち、サタンは彼らのあわてぶりをあわれむよりもたのしんでいるとっていいだろう。

ここでも又、サタンがビエルゼバブを目ざめさせたのと似た手口を用いている。即ち意識がまだもうろうとしている間に、脅しによって異論

もなくすっかり服従させてしまうというやり方を用いて成功してしまうのである。

無数の天使たちが、サタンの声をきいて度肝をぬかれて、あわてているさまは、彼らの怠惰を示しているのであり、それはサタンにとって嘆かわしいことであるが、皮肉なことに他方では、それはサタンへの服従を保証していることになるのだ。サタンが彼らのあわてぶりを愉快だと思っているとすれば、それは、彼らの愚鈍さを軽べつしていることにもなると見ていだろう。サタンはこの無数の天使たちを目ざめさせる仕事を今やなしおえたのである。

IV

サタンの目ざめはねたみと復しゅうによるものであったが、その結果の「天の戦い」は敗北に終わったことはVI巻が示している通りである。しかし、地獄におちて、真先に目ざめたサタンは、「天の戦い」の敗北から何を学び、何を企むにいたったか。

そもそも神がサタンとその軍団を撃ち、地獄へおとしたのは、サタンがいかなる価値よりも力の価値に優るものなしとし、神の座を武力でえようとしたからである (VI.820—3)。

だが、サタンが「天の戦い」をおこすまでに、アブディエルに悔改めを迫られているが、悔い改めなかった (V.845—8)。しかし敗北そのものも決して悔改めをもたらさなかった。かえって—そう敵意と復しゅう心にもえて、まだまけてはいないと主張するのである。そして「武力にてか策謀にてか」(I.121) 永遠の戦いを決意するのである (I.662)。

それは何故か。なぜ全能者に永遠の戦いをしかけようなどとまだ考えられるのか。いや、サタンがまだ神の力をあなどって、もう一度勝てると思ひ違いをしたのだと認めたにしても、ミルトン自身は、そう思ひ違いをしていない筈である。とすればミルトンはサタンをして敗北から何を学ばしめ何をさせようとしむけたのか。

サタンとその軍団が地獄におちてからは、神の追撃の手はおさまった。ここからすべてが再出発するのである。又地獄とは、神からも天国からも無限に遠いところ (I.73—4) なのである。そこに神はいないとサタンが考えたところにサタン自身の安どがある。

天使たちは「運命」として滅びない（I.116—7），その上「我々の心と霊は依然として不敗で，無傷のまま残っている」（I.139—40）ことをサタンとビエルゼバブは発見する。ビエルゼバブにとってこのことは永遠の罰をうけなければならないということである（I.147—52）。即ちビエルゼバブは悲観論者なのであった。

しかしサタンによれば，（既出）

いかなる善も我らのわざとならず
常に悪をなすこそ我らの唯一の喜び，
そは彼の高意に逆らうことなれば，
我ら抗らう者故，もし彼の摂理
我らの悪から善をひき出すことを求めば
我らの働きその目的をくつがえし
善から常に悪の手段見出すことなるべし。 （I.159—65）

実はI.211以下にあるように，すべてを支配する神のみむねとゆるしが働いて，その悪業を思うままにくわだててることを見のがしておられるのである。しかし一度地獄に叩きおとされたものが，やがて少しは自由に動けるということは，サタンにとっては皮肉にも有難いことであった。

しかし彼らが神に感謝した筈はない。かえって彼らは自分たちの力でそれができたと思ったのである（I.240—1）⁸⁾。サタンは叛逆のはじめから心をかたくなにしていたのであって，それがサタンの本質である（IV.47—57）。

心をかたくなにするということは聖書の伝統では，弱さの極限に於てではなく，かえって状況がまだ少し有利に展開すると（空しい）希望をいだいた時におこるのである（Cf. Ex. 9: 34）。サタンが地獄において，神に対して心をかたくなにしているのも，神の追撃が止み，平静をとりもどして，自らの安全を確認をしてからのことであった（I.178—9）。

武力では敗れたが，その霊質において無傷であることを発見し（Cf. I.139—40），その上でサタンは心をかたくなにすることに集中するのである（I.105—111）。そして，ビエルゼバブにそのように目覚めさせる。

そこでサタンは神ですらそのサタン及び彼の軍団の栄光を奪うことができないとうそぶくのである。彼は自分の意志力の集中を武器として，

神への復しゅうができるということに目ざめたのである (I. 106—122)。

神は全能である。しかし神でもかたくなな霊を自由に服従させることはできない。なぜなら服従とは強制ではなく、自由な行為であり、自由な服従のみが服従である。そして神は天使の霊を、神に従うのも、おちてそむくのも共にできるように自由に創ったからである (III. 98—112)。

このような、そむくことが自由であるという目ざめが最も危険であり、それが、I. 35 の “envy and revenge” をもってサタンが人を神からそむかせその結果、「死」と「苦しみ」を人にもたらしたとミルトンは考えたのである。

ミルトンは自らこのサタンを嘆いている。

In heavenly spirits could such *perverseness* dwell?
But to convince *the proud* what signs avail,
Or wonders move *the obdurate* to relent? (VI. 788—90)

天なる霊にかかるひにくれが住むか？

高ぶる者を説得する何の徴しがあるか

又何の不思議が頑固者を悔改めに動かすか？

V 結 び

Paradise Lost のはじめの祈願 (invocation) に於て、ミルトンは聖霊に何度もよびかける。第一に、エデン物語の大事件について語れ (I. 1—6)、といい、第二に、人間をそのエデン物語においてそそのかしたものが何であったか (28)、誰であったか (33) と問う。

これはホーマーとヴァージルの伝統に則ったものである⁹⁾。だからといって単に形式的であるとはいえない。何故ならこの伝統がミルトンにとって実に好都合であり、ここに彼がエデン物語の神秘的な「事情」の導入を展開できたからである。

この伝統的な祈願は、その答を出す為の準備である。即ち、ミルトンは答えを用意しているのだ。即ちミルトンは、人間の死と苦しみの事情を、遠く天の事情の中に見出しているのである。そしてそれを語りうるものは何か。聖書の短い記事をこえて語りうるものは、彼の詩的洞察を

支え、それに光を与える聖霊以外にない。その聖霊に彼は祈り求めたのである。

ミルトンは、サタンの反逆を衝き動かしたのは「ねたみと復しゅう」である(35)と位置づけた。ミルトンの洞察は決して型にはまったものでないことはサタンの告白に於て明らかである。

又サタンの神への反逆を、即ち彼の全軍の反逆たらしめていないところがミルトンの苦心のところであったろう。ミルトンはサタンの目ざめと部下の眠りとを巧妙に使いわけながら、サタンの意識的悪を、彼の全軍団の悪への意識に拡大させていく。

それには先ずサタンの悪が如何に神の善にてっていして逆らうものであり、それが如何にすばらしく見え、読者にも目を見はらせるようなものであるかが大切な条件であった。ミルトンが知らずに悪魔の味方になったといわれるのもわからぬことではない¹⁰⁾。

ミルトンは「神の摂理を正しいと」(I. 26)する為には悪魔の本質も究める必要があった。そしてミルトン自身も嘆かざるをえないような悪魔を描き切った時に、その悪魔は本物であった。

ミルトンはどんな事があっても、時いたるまで神に反抗しつづける悪魔像を描いたのである。それを背景としてこの *Paradise Lost* のアダムとエバの物語が展開するのである。

即ち、*Paradise Lost* にはこの悪魔像の永遠化ともいえるものが先ず必要であったといえよう。

サタンの「目ざめ」を整理するならば、そもそものはじめが「しつとによる目ざめ」であり、そこから復しゅう心が生じ、それが消えない。それが次に「天の戦い」における敗北とそれによる地獄落ちになつてからは、不滅故の罰痛の恒久的認識と、力による敗北故の恒久的痛恨を生みだす、といえるであろう。つまりサタンはその目ざめ故に気喪がゆるされないのである。

このようなサタンの目ざめた、サタン像の偉大さときりはなすことができない。この目ざめたサタンは、ミルトンが一貫して求めた人物像そのものであったろう。

サタンの堅忍不拔さ、強韌な忍耐、向う見ずな考え方、時に及んで立ち上る力、指導力、圧倒的な難関に対応できる知能、とくに屈服の拒絶¹¹⁾はサタンがのがれることのできない「目ざめ」のしからしむるも

のといってよいであろう。

I. 125—6 の「痛みつも/高く誇りつつ、されど深き絶望になやみ」というセリフは、Waldock によれば I. 105 以降のセリフの効果が大きすぎるのを心配して、読者の袖を引き、サタンの壮大な言葉を鵜呑みにするなといった注釈をしているのだという¹²⁾。

Waldock の言うことに一理あるかもしれない。しかしそれは一そうサタンを、プライドと絶望に引き裂かれんばかりの緊張の描写を印象づけるのに役立っているのであって、決してサタンの屈服の拒絶をレベルダウンさせたり、うすめたりする方向に役立っているようには見えない。

言いかえれば、ミルトンの「注釈」がサタンのことばの効果が大きすぎるので打ち消そうという目的をもっているとは思えないということである。何故なら、プライドが高く発言が壮大であればあるほど、その絶望の意識の深さは偉大に、かつ鮮明になるからである。そしてこうすることがミルトンの計算ではなかったか。

この「注釈」がいかなる位置におかれているかをしらべて見ると、サタンのセリフと、ビエルゼバブのセリフの入れ代わる最も劇的な緊張感のはりつめた橋渡しになっていることを指摘せねばなるまい。

サタン一人が目ざめていて、サタンの「教育」がビエルゼバブに、どのような力を及ぼしたかを読者が興味をもって知ろうとしている場面であり、ビエルゼバブの反応を見守る場面である。本来気喪してられないサタンの目ざめの本質と、その偉大さをいかにミルトンが、この短い段落で演出しているかがわかる。

[注]

- 1) サタンが「天の戦い」をおこしたことについての内的告白は IV. 42—57 にある。
- 2) IV. 270—1 “once upright/And faithful”
- 3) V. 695 “unwary”
- 4) John Carey and Alastair Fowler (ed)
The Poems of John Milton PL i. 217—20 n.
- 5) II. 329—331, II. 344—8, II. 362—71, II. 378—380.
- 6) *Op. cit.* Fowler. i. 259 n

- 7) I.192—270 Beelzebub の服従の誓いは 272 からつづく。
- 8) *Op. cit.* Fowler *PL* i. 240—1 *n.* see also *PL* I. 210—20.
- 9) *ibid.* Fowler *PL* i. 27—49 *n.*
- 10) Waldock: *Paradise Lost & Its Critics* Cambridge UP. 1966 p.77.
- 11) *ibid.* p. 77.
- 12) *ibid.* p. 78.